

前期

文系

二〇二二年度入学試験学力検査問題

国

語

人文社会学部、法学部、経済経営学部 経済経営学科 一般区分、
都市環境学部 都市政策科学科 文系区分

九〇分

答案用紙 二枚

注意

- 一、監督員の合図があるまで、問題の内容を見てはいけません。
- 二、受験番号及び氏名は、答案用紙の所定欄に必ず記入してください。

(例)
受験番号
1234567 X
の場合

↓

	1	2	3
4	5	6	7 X

- 三、解答には黒鉛筆またはシャープペンシルを使用し、必ず配付された答案用紙に記入してください。
答案用紙には、解答に関係のないことを記入してはいけません。
- 四、試験中に不鮮明な印刷等に気付いた時は、手をあげて監督員に申し出てください。
- 五、答案用紙を切り取ったり、持ち帰ったりしてはいけません。
- 六、問題冊子の余白は利用可能ですが、どのページも切り離してはいけません。
- 七、問題冊子は、持ち帰ってください。また、試験終了時刻まで退室できません。

—
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

※新右衛門が最愛の妻、いとけなき時より、よろづに心みじかく、ただけしかりければ、かなしき者にもじひのめぐみなく、めしつかふわらはにも、哀憐のなさけうすかりけり。されば、「人は似るを友とするならひなるに、悟道の居士になれそひて、たふときをしへをしらざりける事、いか様むくいのはぢなるべし」と、みな人ごとにさみしける。新右衛門あけくれふびんに思ひて、もとより道者の事なれば、たましひをください、にうわのをしへをすすめける。しかれども露した(a)がふけしきみえざりけり。

ある時あまりいたく制しければ、女房かほをあかめて聞こえけるやう、

あさ糸のながしみじかしむつかしや、うむのふたつにいつかはなれん

とただかやうによみておともせず。親当おどろき、日頃のふるまひに相違して、歌の心あまり殊勝なりければ、はづかしく思ひ、「わがをしふるにおよはず」とて、肝にめいじてかんじける。「ふしぎなるかな、今までははういつじやけんまかに身を任せ、誠にくらぎ人なるとおほえしが、扱は我よりさきにさとりけるものを」と思ひ、したをまきける。

其後はふうふのなさけあさからず、ひよくのちぎりふかりけり。上しも水魚の心をなし、むつびけるに、つらきものいひなしにてや有けん、ひそかにことつまをかさねて、ふた心有よし、まことしやかに新右衛門につげける。新右衛門もとよ

り、いつはりをしんずるものにはあらざりけれども、「げにげに思ひあたる事あり」とて、物をしのびぬをのこなりければ、しばしの延引もなく、りべつしてこそおくりける。女房は折ふし懐妊の心ありてなやみければ、うらみの心あさからず、「つるぎをのみ、ほのほをかうむらん」と、もたえかなしみけれども、ちからなくいでにける。無実の程ぞあはれなる。

しかれども、あとかたもなきいつはりなれば、誠がつひにあらはれて、ざんげんのしわざとしりにける。新右衛門後悔して、又よびむかへんとて、わがあやまりなるよしいひつかはしければ、女房返事に、

秋風の人の心にとつならば 実みのらぬさきにいねといはざる

とかやうによみおこせて、ふたたびかへらざりける。それより、「女房のなさけたぐひなく、いさぎよきふるまひは、かへりてまさりけり」と、^Vほめぬものなかりしとなん。ある人かたり侍り。

(「一休ばなし」より)

※注

新右衛門にながわしん 蜷川みづ新右衛門親当もんぢかま。室町時代の武士、連歌師。禪宗に帰依して一休宗純と親交をもった。

悟道の居士こ 出家しないで仏門に帰依している男性のこと。

さみしけるさ 狭さみすはあなどる、軽んずること。

にうわ 柔和。性格や態度がやさしくて穏やかなこと。

うむのふたつにいつかはなれん 〓「うむのふたつ」は、有と無のどちらか一方に固執することの誤りをいう仏教の教え。

「うむのふたつにはなる」は、悟りを開くことをいう。なお、「うむ」は「有無」と「續つむ」を掛ける掛詞。

はういつじやけん 〓放逸邪見。わがままで思いやりがないこと。

ひよくのちぎり 〓比翼の契り。夫婦の契り。

問一 波線部(a)～(d)を現代語に訳しなさい。

問二 傍線部①～⑤の助動詞の意味を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- A 完了
- B 過去
- C 尊敬
- D 断定
- E 推量
- F 打消

問三 傍線部Ⅰ「みな人ごとにさみしける」とあるが、それはなぜか。問題文に即して説明しなさい。

問四 傍線部Ⅱ「したをまきける」とあるが、その理由を問題文に即して説明しなさい。

問五 傍線部Ⅲ「思ひあたる事」とはどのようなことか。問題文に即して答えなさい。

問六 傍線部Ⅳの和歌について、次の問いに答えなさい。

- (1) 「実のらぬさきに」とあるが、この歌では「実のる」とはどういうことを意味するか。問題文に即して説明しなさい。
- (2) 掛詞「いね」は何と何を掛けているか。説明しなさい。

問七 傍線部Ⅴ「ほめぬものなかりし」とあるが、その理由について、問題文に即して五〇字以内で説明しなさい(句読点も字数に含める)。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

古代人にとって稲はもともと作物ではなく、けっして農業生産の単位などではなかった。稲は本来的には（それ固有の目的「究極」を秘めており、精霊的な真実を持つ存在なのだ）（それが、「稲には霊が宿っている」という信仰の基盤である）。農耕に勤しむ人間は、このことを、奥深くで、必ず意識している。つまり稲は本来的には（霊）的真実を持つ存在であり、自分たちともある種の深い連続性を秘めているのに、農作業のなかでは（有用な作物）として捕捉されている。それ固有の目的「究極」から逸らされ、その自然的生命体としての在りようを否定する仕方で行き出されて、まるで鋤や鍬のような道具が位置する（面）と同じような面のうえにすえられている、と。

そういう奥深い意識がなかったとすれば、稲の初物を捧げる祭りは生まれなかっただろう。ということはつまり、そうした祭りは必然的に、いったん否定的に媒介され、（対象）化されることで、その対象化の活動（すなわち労働）を実行する主体である人間に役立ち、奉仕するよう作り変えられた生産物としての稲を、もう一度否定することを通じて、その本来的な在りように戻す、という意味を持ったはずである。古代人の心的プロセスを、こう想像してもよいだろう。（霊）的真実を持つ存在である稲を栽培し、加工し、操作して、利用する物、有用な物に変えてしまったということは、（稲を）（ア）プロヨクし、失墜させたこととなる。だからなんとしても稲に宿る霊を、（A）本来の真実へと立ち返らせねばならない。

そのためにはどうすればよいのか。日常的な行動や活動の循環のなかで、そのまま享受し、利用するのではない。なぜならそのように有益な活動の連なったサイクルのなかで消費されたり、利用されたりしている限り、生産物としての稲や羊は基本的に（B）（事物たち）の位置する次元にとどまっているから。したがって、羊を殺害するとか稲の穀粒を食べて消し去るといっても、民衆のひとりひとりが日々（イ）のカテとして殺害したり、食べたりするのではなく、生産（すなわち再生産）に役立つ回路から引き離すような仕方で破壊するのだからなければならない。民衆の個人が消費する場合、各人はその食物から新たな活動エネルギーを得て、再び生産活動に従事できる。すると羊や稲は見かけ上破壊され、消失したかに思えても、実はその（有用な事

物としての価値を、持続のうちに保存する。

だからこそ、供儀(および祝祭)として破壊し、消失する、というふるまい方が発生したのだ。捧げ物、贈り物にする、という供儀[〓]祝祭が、どうしても必要なものとして求められたのである。^〇「事物の世界」を超えた次元がなくてはならないものとなった。生産活動を中心とし、その拡大や再生産に役立つやり方で享受(つまり消費)したり、交換したりする、通常のエコノミーの円環的回路を超えた^{かなた}彼方の次元が、必須のものとして感受されたのだ。こうした(彼方)という次元がおそらく、少しづつ(神々の審級)として定まっていこう。

〈神々への捧げ物〉として贈与されれば、肥えた羊や豊かに稔^{みの}った稲はなにも役立つことのない無益な仕方だ、だがしかし(晴れがましい)様式で消失されることになる。

肥えた羊を捧げ物として殺害する祭り、あるいは稲の初物を(にえ[〓]神饌)として^(ウ)ケン上する祭りは、根本的にそういう意味を持つている。つまり晴れがましい仕方で純粹に贈与するという意味を持つ。労働の成果である貴重な富を、再生産に結びついた交換や消費という通常の回路の外へと引き出し、^(エ)ソウゴンな、かつ晴れやかな様態で(破壊することだ。農作物・家畜・産物と化していた稲や羊を、光輝あるやり方で否定すること、どこかでなにかに有益となる仕方では消費するのではなく、その〈事物〉性を究極的に破壊し、消尽することである。

それゆえ^D供儀にとつて本質的なのは、殺害して血を流すことではない。そうではなく、贈与すること、それも放棄する仕方^Dで贈与することである。ただ、死が(事物たちの構成する秩序)の最大の否定であり、(事物が要請すること)を、すなわち有用性という価値が損なわれることなく保存され、持続することを最も強く断ち切る力であるため、供儀と死は堅く結ばれているだけである。

肝心なのは、生産された富や資財が必ず(持続する必要性)に服したやり方で消費され、手放されるエコノミーの回路から離脱して、なんら留保のない、無条件な(消尽)の^(オ)ゲキレツさに移行することである。作り出し、保存する世界の外に出ることだ。供儀とは(後に来るはずの時)を期待しつつ、そこを目指して行われる作業や操作の、また自覚していようといまいと合理

的に実行される消費や交換——そこに、交換的贈与も含めて、つまり明確に交換へと帰着する贈与も含めて——のアンチ・テーゼであり、その瞬間^Eそのものにか関心を持たない消尽である。その意味で、供儀とは純粹な贈与であり、放棄なのだ。

(湯浅博雄『贈与の系譜学』より 一部改変)

問一 傍線部(A)～(オ)のカタカナの部分を漢字で記しなさい。

問二 傍線部A「本来の真実」とはどういうことか、問題文に即して説明しなさい。

問三 傍線部B「(事物たち)の位置する次元」、傍線部C「(事物の世界を超えた次元)」について、それぞれどういう次元か、問題文に即して説明しなさい。

問四 傍線部D「供儀にとって本質的なのは、殺害して血を流すことではない」とあるが、筆者は「供儀にとって本質的」であるとはどういうことと考えているか、問題文に即して説明しなさい。

問五 傍線部E「その瞬間」とはなにか、問題文に即して説明しなさい。

問六 古代人の供儀についての筆者の考えを100字以内でまとめなさい(句読点も字数に含める)。

